

## 第 49 回知覚コロキウム

会場 宮城県秋保温泉 ホテルニュー水戸屋

日程 2016 年（平成 28 年）3 月 15 日～17 日



秋保大滝 冬景色

東北大学大学院文学研究科心理学講座 第 49 回知覚コロキウム世話人会

行場次郎、坂井信之、大沼卓也、立花 良、朝岡 陸、齋藤五大、慶野友祐

E-mail : [chicollo2016@ml.tohoku.ac.jp](mailto:chicollo2016@ml.tohoku.ac.jp)

電話 : 022-795-6048 (代表)

ファックス : 022-795-3703

郵送アドレス : 〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

## 目次

1. ご挨拶	3
2. 会場・会議に関する情報	4
3. コロキウム・スケジュール	7
4. プログラムおよびアブストラクト	8
5. 参加者リスト	22

## 1. ご挨拶

東北大学で知覚コロキウムをお引き受けするのは、私の記憶する限り 4 回目となります。第 1 回目は 1970 年代後半に川渡セミナーハウスで、第 2 回目は 1986 年に仙台市茂庭荘で、第 3 回目は 2004 年に山形県上山温泉で開催しました。今回、九州大学の上田先生からご依頼があり、お引き受けすることになりました。前回からはや（まだ？）11 年が経過したのですが、同じところで開催というのも興がないと思い、みちのくの温泉として名高い、そして仙台の奥座敷とよばれる秋保温泉に会場を予約しております。光陰矢のごとしであっても、いつまでも変わらないのは知覚コロキウム参加の皆さまの研究への情熱だと思います。年度末の多忙な時期ではありますが、早春のみちのくの温泉に多数お集まりいただき、活発で楽しい研究談義をくりひろげていただければと存じます。

なお、最終日の午後からは仙台市内にて、日本基礎心理学会フォーラムが開催されますので、こちらもおわせてご参加ください。

第 49 回知覚コロキウム 世話人会代表 行場次朗

## 2. 会場・会議に関する情報

### 2.1. 会場

ホテルニュー水戸屋

住所：〒982-0241 宮城県仙台市太白区秋保町湯元薬師102

電話: 022-398-2301

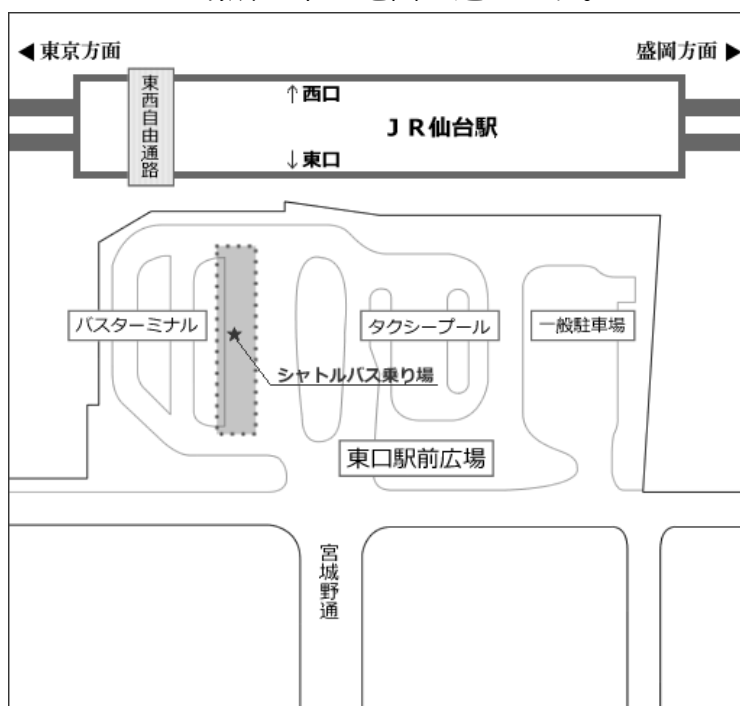
URL: <http://www.mitoya-group.co.jp>

### 2.2. 交通案内

ホテルへのシャトルバスは仙台駅東口バスプールより、15日10時半に出発予定です。このシャトルバスへのご乗車は事前予約が必要となりますので、シャトルバスご利用の方は、**必ず事前にお知らせください**。

また、知覚コロキウムのために一台バスをチャーターいたしました。チャーターバスは15日12時半に仙台駅東口バスプールより出発いたします。このバスの定員は22名（予約が必要）です。このバスへのご乗車を希望される方は12時16分着のはやぶさ15号以前に仙台駅に到着する新幹線にお乗りください。なお、このバスも定員が決まっておりますので、**事前にご乗車の連絡をお願いいたします**。

仙台駅東口バスプールの場所は下の地図の通りです。



なお、帰りのシャトルバスは17日11時半にホテルを出発いたします。

## 2.3. チェックイン

チェックインは、こちらでまとめていたしますので、必要ありません。

## 2.4. 参加登録

参加者全員に参加登録をお願いしています。受付は会場前で15日12時から開始いたします。そのとき、参加宿泊費をお支払いいただきます。できるだけお釣りのないように、ご用意ください。

## 2.5. インターネット

1階ロビー・ラウンジスペースおよび3階口演会場にて無線LAN (Wi-Fi) が利用可能です。

## 2.6. 口演・ポスター会場

口演およびポスター会場は、ホテルニュー水戸屋本館3階会議室「櫂・寿」の間となります。ポスター用パネルはすでに設置しておりますので、お手際の折に掲示してください。ポスターは知覚コロキウム期間中掲示してください。ポスターの回収は最終日（17日）の午前中をお願いいたします。

## 2.7. 部屋割

4人部屋の方は、事前にメールでお知らせした部屋にお泊まりください。男性用4人部屋各室には知覚コロキウム世話人が滞在しております。

## 2.8. 食事

朝食と夕食は参加費に含まれます。夕食は会食形式で2階大宴会場にて午後6時半～午後7時半の予定です。誠に申し訳ありませんが、飲み物については各自でご負担をお願いいたします。飲み物を注文される際には、賄いの方に部屋番号をお伝えいただき、サインをしていただくこととなります。お支払いはチェックアウトのときをお願いいたします。

朝食は午前7時～午前9時の間に2階レストランで各自お摂りください。

昼食はホテル内のお食事どころ、付近のコンビニ、NHK「プロフェッショナル」でも取り上げられたお惣菜とおはぎで有名な「スーパーさいち」などで、各自お摂りください。なお、昼食は各自ご負担いただきますようお願いいたします。

## 2.9. 温泉・プール

ホテルには3つの大浴場があり、時間帯により男女の入れ替えがあります。ご利用時間は午前5時～午前10時、午前11時～午前1時となっております。

サウナも併設されておりますが、利用時間は午前5時～午後10時となっておりますので、ご注意ください。

別館には温水プールもあります。利用時間は午前9時～午後7時です。ご利用の方は水着をお忘れないようにお願いいたします。

## 2.10. 歓談

ホテル本館3階の会議室前には歓談用のラウンジがあります。こちらをご利用になり、ご歓談ください。なお、歓談用としてサッポロビール株式会社様よりビールの差し入れを2ケース分頂戴しておりますので、ご希望の方はご自由にお飲みください。

## 2.11. 口演

口頭発表用にプロジェクターおよびスクリーンを準備いたします。口頭発表を予定されている先生におかれましては、PCをご持参くださいますようお願いいたします。なお、こちらではD-SUBコネクタのケーブルを準備しておりますので、特殊なコネクタ（mini display コネクタ、HDMI コネクタなど）を備えているPCをお持ちの先生は、変換コネクタもご持参下さいますようお願いいたします。

口演は発表20分、質疑10分を予定しておりますが、一題あたり30分という制限を守っていただければ、この内訳にはこだわりません。また、座長は特に設けておりません。

## 2.12. ポスター

ポスター発表用のパネルは横90cm×縦140cmです。A0サイズのポスターまで貼り付け可能です。ポスターはコロキウム期間中貼り続けておいてください。ポスターセッション時間を設けておりますが、随時ディスカッション可能です。

また、ポスター発表の先生方は、15日の14時から自己紹介を兼ねて、簡単なポスターのご紹介も2分程度でお願いいたします。その際、パワーポイント形式のスライド（Windows形式でお願いします）を投射することも可能です。ご希望の方はスライドを作成いただき、事前にUSBメモリ等で世話人までお渡しください。

## 2.13. その他

その他、お困りの点、ご不明な点などありましたら遠慮なく世話人までお申し付けください。

### 3. コロキウム・スケジュール

	2016年3月15日 火曜日	2016年3月16日 水曜日	2016年3月17日 木曜日
7:00	/	朝食	朝食
8:00			
9:00		観察距離の違いが視線知覚に及ぼす影響	Experimentによる心理学実験
		特定の手の姿勢情報によって変容する双安定的な視覚運動知覚	芸術作品に対する感性個人差の定量評価
10:00		生体情報センシングとバイオフィードバック	心理学からおいしさへどのようにアプローチできるか？
		感覚内群化が分裂/融合錯覚に及ぼす異なる影響	総括（フリーディスカッション）
11:00		音を隔てる「時間」は知覚されるべく存在するか Intelligibility of locally time-reversed speech in four languages: Comparison among Chinese, English, German, and Japanese	閉会のご挨拶 チェックアウト シャトルバス出発
12:00	受付開始 仙台駅貸切バス出発		
13:00			
	ポスター掲示		
14:00	ご挨拶・自己紹介・ポスター紹介 二種類の並置混色とホワイト効果	うま味物質による塩味増強効果の検討 fNIRSによる炭酸水摂取後の脳血流応答および知覚強度と嗜好性の関連性	基礎心理学2015年度第2回フォーラム 東北学院大学 土樋キャンパス8号館 押川記念ホール
15:00	連続運動としての知覚が生じる時間限界について 興行きを持った窓枠は2次元画像（写真）興行きを促進する	特別講演 口腔内での炭酸刺激味の受容機構・味の嗜好性を左右する生理的因子	
16:00	視野競争における刺激の特徴と大きさ及び偏心度の関係		
	ポスターセッション1 ・視覚ターゲット検出における怒り顔優位効果と情動強度との関連 ・構成要素の経時表示による逆Müller-Lyer錯視 ・皮膚感覚による自己運動知覚の検討：能動運動と受動運動の比較 ・皮膚感覚による自己運動知覚の検討：刺激変化の影響について	ポスターセッション2 ・知覚と表現～映画における表現技法について ・知覚心理学に基づく心理学的「表現論」の可能性 ・異なるイメージ処理モードによるネガティブ記憶の想起が想起内容とネガティブアフェクトに与える影響	
17:00			
18:00	夕食	夕食	
19:00			
20:00			

本館3階会議室「櫻・寿」

本館2階

東北学院大学土樋キャンパス8号館 押川記念ホール

## **4. プログラムおよびアブストラクト**

特別講演・口演・ポスター会場はすべてホテルニュー水戸屋3階会議室「櫻・寿」となります。

### **4.1. 3月15日 火曜日**

**12:00**           **受付開始**

**13:30**           **ポスター掲示**

**14:00**           **開会のご挨拶**

行場次朗（東北大学大学院文学研究科・第49回知覚コロキウム世話人代表）

**14:05**           **参加者自己紹介・ポスター紹介**

（ポスター発表の方はポスターの簡単なご紹介もお願いいたします）



## 14:30～16:30 口頭発表 1（視覚）

14:30～15:00

15.E1. 二種類の並置混色とホワイト効果

北岡 明佳（立命館大学文学部）

並置混色は点描とカラーディスプレイの原理として知られている。点描は CMY を原色とする減法混色、ディスプレイは RGB を原色とする加法混色という違いがある。これらの混色による画像の知覚と、強力な明るさの錯視として知られるホワイト効果との関係を考察する。ホワイト効果、逆ホワイト効果、およびホワイト効果様の明るさ対比錯視は、並置混色のメカニズムから説明できるという仮説を提唱する。

15:00～15:30

15.E2. 連続運動としての知覚が生じる時間限界について

中嶋 豊（電気通信大学大学院情報システム学研究科）、阪口 豊（電気通信大学大学院情報システム学研究科）

本研究では、高速移動物体の見えに対しモニタのリフレッシュレートが及ぼす影響について検討した。同じ速度で運動する刺激を、DLP 高速プロジェクタのリフレッシュレートを 60-720 Hz の範囲に設定して提示した。参加者は、提示された運動刺激が離散的に知覚されるか連続的に知覚されるかを 2AFC で回答した。その結果、運動知覚が離散的から連続的へと切り替わる時間閾値が、従来モニタでは提示不可能な時間範囲（120 Hz 以上）に存在することが示された。本発表では Duty 比が運動知覚に与える影響や、DLP 高速プロジェクタの特性についても紹介する。

15:30~16:00

15.E.3 奥行きを持った窓枠は2次元画像（写真）奥行きを促進する

下野 孝一（東京海洋大学），木原 健（鹿児島大学），東山 篤規（立命館大学），Hiroshi Ono（York University）

本研究では、2次元画像（写真）の前、あるいは後ろに枠組みを提示し、写真を数分観察すると写真の見かけの奥行きは増加することを示した。実験では10名の被験者が、前後に奥行きをもった枠組みと枠組みのない写真の見かけの奥行きの程度を5段階評定した。写真は20枚、枠と写真の網膜像差は5種類（ゼロ、交差性、非交差性 3.8' , 11.3' ）であった。実験の結果、写真の平均評定値は枠の網膜像差の関数として増加した。

16:00~16:30

15.E.4 視野闘争における刺激の特徴と大きさ及び偏心度の関係

加藤麻子（中京大学大学院心理学研究科）

視野闘争は検査刺激と反対眼刺激の交点からの抑制の波及によるとされている。一方で交点のみならず刺激の端点が抑制している可能性も存在する。また、視野闘争には偏心度も関連していると示唆されている。

従って、刺激の大きさと偏心度の関係を検査刺激と反対眼刺激の両者ともに線分の刺激で検討した。その結果、刺激の大きさと偏心度の間には関係がみられた。そこで、刺激の端点が抑制している可能性から、端点のみからなる反対眼刺激を用いて刺激の大きさと偏心度の関係を検討した。

## 16:30～18:00 ポスターセッション 1

### Pa1. 視覚ターゲット検出における怒り顔優位効果と情動強度との関連

竹島康博（文京学院大学人間学部）

本研究では、怒り顔優位効果におけるターゲットの検出成績と、喚起される情動の強度との関連を検討した。事前に顔刺激の情動価と覚醒度を評定してもらい、情動価の高い刺激と低い刺激および中性刺激を参加者ごとに選定した。実験では、高速逐次提示される顔刺激の中から 2 つのターゲットを検出する課題を行い、2 番目のターゲットに選定した刺激を提示した。その結果、検出成績は情動価の強さに関わらず情動刺激の方が中性刺激よりも高くなっていた。

### Pa2. 構成要素の経時提示による逆 Müller-Lyer 錯視

金子歩駒（新潟大学人文学部）、白井 述（新潟大学人文学部）

一般的な Müller-Lyer 錯視図形においては、内向矢羽根を伴う線分の長さが過小視され、外向矢羽根を伴う線分の長さが過大視されることが知られている。本研究では、矢羽根と線分を分割し、それらを経時的に提示することで、内向矢羽根を伴う線分の長さ過大視され、外向矢羽根を伴う線分の長さが過小視されること、すなわち通常の Müller-Lyer 錯視とは逆の錯視が生じることを報告する。

### Pa3. 皮膚感覚による自己運動知覚の検討：能動運動と受動運動の比較

小松英海（慶應義塾大学），村田佳代子（首都大学東京），中野泰志（慶應義塾大学），市原 茂（株式会社メディア・アイ感性評価研究所），石原正規（首都大学東京），増田直衛（静岡産業大学）

Murata et al. (2014) は，視覚や聴覚の情報がなくとも，皮膚感覚と前庭感覚からの情報により自己運動が知覚されることを示した。また，皮膚感覚における自己運動知覚を身体の物理的移動を伴う場合と比較を含めて検討した一連の研究の中で，皮膚感覚における自己運動知覚において能動運動と受動運動を比較した。その結果，能動運動では，潜時が長くなった。つまり，自己運動知覚が生起されにくくなった。本発表では，他の指標とあわせて考察する。

### Pa4. 皮膚感覚による自己運動知覚の検討：刺激変化の影響について

村田佳代子（首都大学東京），小松英海（慶應義塾大学），中野泰志（慶應義塾大学），市原 茂（株式会社メディア・アイ感性評価研究所），石原正規（首都大学東京），増田直衛（静岡産業大学）

Murata et al.(2015)は身体の物理的移動との比較を行い，皮膚感覚への風が自己運動の方向を明確化することを明らかにした。本研究においては，実験中の風の発生源との距離を変化させることにより，皮膚に当たる風の強度を変化させた。その際，風の発生源を移動させる条件と知覚者を移動させる条件を用意した。潜時，持続時間，評定値に加えて，知覚された方向，距離を指標とし，前提感覚から生じる自己運動知覚と皮膚感覚から生じる自己運動知覚の関係を考察する。

## 4.2. 3月16日 水曜日

### 9:00~12:00 口頭発表2 (多感覚)

9:00~9:30

16.M1. 観察距離の違いが視線知覚に及ぼす影響

森 将輝 (慶應義塾大学), 渡辺利夫 (慶應義塾大学)

本研究は、実験参加者からモニターまでの観察距離が1 mまたは4 mのいずれかの地点において、実物大の顔写真の視線方向が判断された際、視線知覚空間が異なるかについて検討した。観察距離が1 mまたは4 mである場合の視線知覚空間について、側方角度と奥行距離ごとに線形回帰式をフィットさせた。その結果、観察距離4 mよりも1 mである場合の視線知覚空間は、側方角度が大きく、奥行距離が短いことが示された。

9:30~10:00

16.M2. 特定の手の姿勢情報によって変容する双安定的な視覚運動知覚

齋藤五大 (東北大学大学院文学研究科), 行場次朗 (東北大学大学院文学研究科)

これまでの実験では、参加者が双安定性を有する通過・反発刺激の遭遇点の真下で両手を合わせた姿勢時に、他の手の向きの条件に比べて有意に反発知覚の増加を報告した。そこで本実験では、両手を合わせた姿勢に近似した条件（手の間に板を挟む、手の間を空ける）を加えて検討したところ、両手を合わせた姿勢の条件のみで同様の効果が生じた。これらの結果は、その特有の姿勢に関連した自己受容感覚、触覚及び力覚が視覚運動知覚の変容に重要であることを示唆する。

10:00~10:30

16.M3. 生体情報センシングとバイオフィードバック

長嶋洋一（静岡文化芸術大学）

筋電センサ、皮膚電位センサ、脳波センサ、触覚センサなどの生体情報センサについて、メディアアート、リハビリ療法、メンタルヘルス、エンタテインメント、などの領域との関係について研究・制作を進めている現状を報告する。キーワードは「内受容感覚」と「バイオフィードバック」であり、人間の「意識・注意」という危機回避の本能的な脳機能と関係している点に注目して、具体的な応用を目指した実験・試作・検討を進めている。

10:30~11:00

16.M4. 感覚内群化が分裂/融合錯覚に及ぼす異なる影響

朝岡 陸（東北大学大学院文学研究科），竹島康博（文京学院大学人間学部）

視覚刺激の知覚される提示回数が同時提示される音の提示回数に影響を受ける現象を分裂/融合錯覚という。本研究はこの錯覚に対する感覚内群化の影響を検討した。視覚刺激、視覚誘導刺激、音刺激を同時に提示し、視覚刺激の提示回数を判断する課題を行った。結果として、音刺激と視覚誘導刺激の提示回数が異なる時、分裂錯覚は起きにくくなったが、融合錯覚の生起率は変化しなかった。これらの結果は感覚内群化が分裂/融合錯覚で異なる影響を及ぼすことを示唆する。

11:00~11:30

16.M5. 音を隔てる「時間」は知覚されるべく存在するか

境 敦史 (明星大学)

知覚は、しばらく観察しなければ成り立たないという点で、時間的である。しかし、時間は、空間と同様に、知覚されるべく環境に存在してはいない。というのも、時間が空間と独立であるならば、(最初、最後、前後、後先、長短、流れといった)空間的表象に依拠した時間の記述は、時間の本質に言及できていないことになる一方、空間的表象を援用せずに時間を語る事が不可能であるならば、その事実自体が「時間は、地上環境で生じる事象の知覚から抽象された概念である (Gibson, 1975)」ことを物語っているからである。従って例えば、継時呈示した3音を隔てる2つの「時間」の長短に関する精神物理学的測定への成立は、時間間隔の存在を示す根拠にはならない。このような、事象知覚から抽象される時間概念については、「青葉城恋歌」にその本質が端的に詠われていると思われるので、仙台の地でこのことについて議論と考察を深めたい。

11:30~12:00

16.M6. Intelligibility of locally time-reversed speech in four languages:

Comparison among Chinese, English, German, and Japanese

Kazuo Ueda (Kyushu University) , Yoshitaka Nakajima (Kyushu University) ,  
Shunsuke Tamura (Kyushu University) , Akihiko Shichida (Kyushu University) ,  
Wolfgang Ellermeier (Technische Universität Darmstadt) , Florian Kattner  
(Technische Universität Darmstadt) , Stephan Däbler (Technische Universität  
Darmstadt) , Ngar Nie Neo (Technische Universität Darmstadt)

It was investigated how the intelligibility of spoken sentences in four different languages (Japanese, German, English, and Chinese) changes as the duration of segments locally reversed in time increases. Thirty-five sentences spoken by both a male and a female speaker in each language were extracted from a database. The sentences were divided into segments of equal duration (20-170 ms); each segment was reversed in time, and subsequently joined with the other segments in the original order. The resulting utterances were presented diotically to 28 native speakers of each language through headphones. The participants were instructed to write down what they heard without guessing. Intelligibility (percentage of correct morae or syllables) was above 90% when segment duration was 45 ms, but dropped with increasing segment duration to below 15% at 120 ms. The 50% point was around 65-80 ms irrespective of language. A common time-averaging mechanism is likely to work in speech perception across different languages.

**12:00～14:00 昼食**

**14:00～15:00 口頭発表 3 (味覚・口腔内感覚)**

14:00～14:30

16.E1. fNIRS による炭酸水摂取後の脳血流応答および知覚強度と嗜好性の関連性

丸山 弘明 (サッポロビール(株)、東北大学文学部), 荒木 茂樹 (サッポロビール(株)), 小島 英敏 (サッポロビール(株)), 澁本 潤 (サッポロビール(株)), 坂井 信之 (東北大学文学部)

飲料水において、炭酸による刺激感は清涼感をもたらし、好き嫌いを決定させる重要な要素の一つである。本研究では炭酸刺激に対する脳応答および嗜好性との関連を把握することを目的として、fNIRS (近赤外線分光法) を用い、炭酸水を飲んだ時の脳血流量変化を計測した。結果、炭酸の刺激によって両側の前頭前野外側部近傍の酸素化ヘモグロビンが有意に増加することが明らかになった。さらに、脳血流量の変化と知覚強度や嗜好性との関連性について考察を行った。

14:30～15:00

16.E2. うま味物質による塩味増強効果の検討

大沼卓也 (東北大学大学院文学研究科), 坂井信之 (東北大学大学院文学研究科)

うま味物質 (グルタミン酸ナトリウム: MSG) による塩味の増強効果について、Time-intensity 法と左右耳下腺の生理計測 (NIRS) により検討した。その結果、0.10%MSG を添加することで、低濃度の NaCl 溶液 (0.18%) の塩味知覚時間の有意な伸長がみられたが、耳下腺活動における効果はみられなかった。これらの結果から、うま味物質による塩味増強効果は、塩味の持続感を高めるという形で作用すること、そしてその効果は末梢性ではなく中枢性の作用である可能性が示唆された。



## 15:00～16:30 特別講演

口腔内での炭酸刺激味の受容機構・味の嗜好性を左右する生理的因子  
駒井三千夫（東北大学・大学院農学研究科・栄養学分野）

炭酸の刺激味の受容機構だけでは物足りない可能性があるため、当研究室で行ってきた身体の生理状態と基本味の嗜好性についても言及したい。

### 1. 「口腔内での炭酸刺激味の受容機構」

甘味や苦味などの5つの基本味は、舌上皮組織の味神経の経路で受容されるのに対して、炭酸は一部は味神経で受容されるほか刺激性の成分は三叉神経（舌枝などの）経路で受容される。すなわち、炭酸のシュワシュワ感は、冷・温・触・痛の感覚を受容伝達する三叉神経経路で脳に信号が伝えられる。私どもの研究により、その受容メカニズムには、炭酸脱水酵素という亜鉛酵素の反応が必須であることが分かった。つまり、この酵素によって、炭酸ガス（溶存CO<sub>2</sub>）がプロトン（H<sup>+</sup>）と重炭酸イオン（HCO<sub>3</sub><sup>-</sup>）に変換された後に刺激感を感じる。最近の別な研究者によって、TRP A1というワサビの成分を受容するのと同じ陽イオン感受性イオンチャンネルが介していることも判明した（参考までに、トウガラシのカプサイシンは、同じファミリーのTRP V1を介する）。

### 2. 「味の嗜好性を左右する生理的因子」

味を美味しく感じるには、口腔内の味受容サイトが正常に機能している必要があるのが基本だが、嗅覚が正常に機能していることや身体の代謝状態（＝臓器の代謝生理状態）が健常である必要がある。当研究室では、主として実験動物（ラット）を用いて味覚生理学的研究を行ってきたが、からだの栄養・生理状態が変化すると味の嗜好性が変わることがいくつか証明してきた。その例を示したい。一つ目は、激しい運動を行った後の酸味嗜好性の上昇（＝ヒトでも登山後などに梅干しやレモンなどの酸っぱいものが一段とおいしく感じられる）。二つ目としては、低タンパク質食を慢性的に与えたラットでは、アルコールの嗜好性が低下すること（要するに、酒に弱くなること）、などを示してきた。そのメカニズムをご紹介したい。

## 16:30～18:00 ポスターセッション2

Pb1. 知覚と表現～映画における表現技法について

増田直衛（静岡産業大学）

映画はいくつかのシーケンスから構成されている。シーケンスはいくつかのシーンから構成されている。シーンはショットから切り取られたカットから構成されている。カットをどのように編集してシーンを構成するかについて、どのような技法が考案され、映像心理学として何を問題とすべきか、例を示して、妄想する。

Pb2. 知覚心理学に基づく心理学的「表現論」の可能性

鈴木 清重（慶應義塾大学／立教大学現代心理学部附属心理芸術人文学研究所）

本研究の目的は、心理学的知覚論（柿崎, 1993）に接続可能な「表現」に関する議論と理論の可能性を考察することである。映像表現の予測と制御に関わる制作工程の技術、技能、技法が鑑賞者の事象知覚に及ぼす効果に関する研究の進捗を報告する。適宜、研究の構想を述べる。映像の技術、技能、技法の現象を「映像環境」という概念にまとめ、映像環境と観察者（制作者および鑑賞者）の相互作用を「作品：知覚／表現」と捉える考え方の可否を議論したい。

Pb3. 異なるイメージ処理モードによるネガティブ記憶の想起が想起内容とネガティブアフェクトに与える影響

慶野友祐（東北大学大学院文学研究科），宮崎章夫（茨城大学人文学部）

本研究では，ネガティブ情動喚起場面（スピーチ課題）の記憶を2種類のイメージ情報処理のモード（Observer Perspective；OP vs Field Perspective；FP）を用いて想起し，その際のネガティブ情動および想起内容を処理モード間で比較した。その結果，FP条件よりもOP条件においてネガティブアフェクトの喚起が抑えられた。また，想起内容の検討のためにプロトコル発話比率を比較した結果，OP条件では「外見的特徴」「自己評価」，FP条件では「感情体験」「思考再現」の思考内容がそれぞれ多くなった。

### 4.3. 3月17日 木曜日

#### 9:00~10:30 口頭発表4 (研究法・感性)

9:00~9:30

17.M1. Expyriment による心理学実験

立花良 (東北大学大学院文学研究科/日本学術振興会), 新国佳祐 (東北大学大学院情報科学研究科), 邑本俊亮 (東北大学大学院情報科学研究科/東北大学災害科学国際研究所)

本研究では、Python 言語の実験用ライブラリ Expyriment について報告する。近年、研究分野における Python 言語の有用性が示され、需要が高まっている。Expyriment は心理物理学実験や神経科学実験用に開発されたスクリプトベースのライブラリであり、高い時間精度での実験制御が可能となる。しかし、日本では Expyriment および Python 言語自体の使用例が少なく、利用者にとっては不明な点が多い。Expyriment の基本的仕様の紹介とともに、具体的な応用例 (眼球運動測定など) についても報告する。

9:30~10:00

17.M2. 芸術作品に対する感性個人差の定量評価

若林正浩 (大阪大学生命機能研究科), 北口正敏 (大阪大学医学部), 内藤智之 (大阪大学医学系研究科)

個人の芸術感性は、他者と共通する成分と個人に特有の成分に分けられると考えられる。本研究では、個人間での芸術評価因子の共通性および、芸術感性の個人差の定量評価を行った。また、芸術感性評価における形容詞の感受性の個人差も検討した。被験者間で共通性の高い潜在因子において色統計量との相関が見られ、色知覚・認知処理の共通性が共通芸術感性へ関与していることが示唆された。また、言語印象評価における形容詞の使用法の個人差は、本研究の被験者群では比較的小さいことが示された。

10:00~10:30

17.M3. 心理学からおいしさへどのようにアプローチできるか？

坂井信之（東北大学大学院文学研究科）

この口演では「おいしさ」について心理学の立場からどのようにアプローチできるかについて話題を提供したい。最初になぜ食品学ではなく、心理学なのかに関する資料とそれらの資料に基づいて立てられた現時点での作業仮説を提示する。その作業仮説について、フロアからの活発な議論を期待したい。

10:30~11:00

総括（全体のディスカッションです）

**11:00**                    **閉会のご挨拶**

行場次朗（東北大学大学院文学研究科・第49回知覚コロキウム世話人代表）

**11:15**                    **ポスター撤収（11:30までをお願いします）**

## 5. 参加者リスト

(敬称略. 申込書に記載されている通り)

阿久津洋巳, 岩手大学

朝岡陸, 東北大学大学院文学研究科

**16M4**・第49回知覚コロキウム世話人会

荒井隆宏,

上田和夫, 九州大学 大学院芸術工学研究院 デザイン人間科学部門/応用知覚科学研究センター

**16M6**

大沼卓也, 東北大学大学院文学研究科

**16E2**・第49回知覚コロキウム世話人会

加藤麻子, 中京大学大学院心理学研究科修士1年

**15E4**

金子歩駒, 新潟大学 人文学部

**Pa2**

北岡明佳, 立命館大学文学部

**15E1**

行場次郎, 東北大学大学院文学研究科

16M2・知覚コロキウム世話人会代表

慶野友祐, 東北大学大学院文学研究科

**Pb3**・第49回知覚コロキウム世話人会

駒井三千夫, 東北大学・大学院農学研究科・食品機能健康科学講座・栄養学分野

**特別講演**

小松英海, 慶應義塾大学

**Pa3**・Pa4

齋藤五大, 東北大学大学院文学研究科

**16M2**・第 49 回知覚コロキウム世話人会

境敦史, 明星大学心理学科

**16M5**

坂井信之, 東北大学大学院文学研究科

16E1・16E2・**17M3**・第 49 回知覚コロキウム世話人会

下野孝一, 東京海洋大学海洋工学系

**15E3**

菅野理樹夫, 高千穂大学 人間科学

鈴木清重, 慶應義塾大学/ 立教大学現代心理学部附属心理芸術人文学研究所

**Pb2**

高島翠, いわき明星大学

高橋伸子, 愛知淑徳大学 健康医療科学部

竹島康博, 文京学院大学人間学部

16M4・**Pa1**

立花良, 東北大学大学院文学研究科/日本学術振興会

**17M1**・第 49 回知覚コロキウム世話人会

中嶋豊, 電気通信大学 大学院情報システム学研究科

**15E2**

長嶋洋一, 静岡文化芸術大学

**16M3**

林美登里, 愛媛大学大学院 医学系研究科 看護学専攻 健康科学・基礎看護学領域 修士課程 2年

鬢櫛一夫, 中京大学

増田直衛, 静岡産業大学

Pa3・Pa4・**Pb1**

松田勇祐, 東京海洋大学海洋工学系

丸山弘明, サッポロビール株式会社価値創造フロンティア研究所

**16E1**

村田佳代子, 首都大学東京

Pa3・**Pa4**

森将輝, 慶應義塾大学 大学院政策・メディア研究科 修士課程 2年

**16M1**

行松慎二, 中京大学

若林正浩, 大阪大学

**17M2**

和田有史, 農業・食品産業技術総合研究機構